

言語論哲学の基礎を求めて

——ウィトゲンシュタイン研究〔Ⅲ〕——

山 口 勲

この精神は、ヨーロッパ文明やアメリカ文明の、我々のすべてが入っている巨大な流れの精神とは異なっている¹⁾。

ウィトゲンシュタイン研究〔Ⅰ〕²⁾は、《論理哲学論考》を扱った。ウィトゲンシュタイン研究〔Ⅱ〕³⁾は、《哲学研究》の第一部、第133節までを扱った。〔Ⅰ〕と〔Ⅱ〕で明らかにしたことは、次のことである。

《論考》の言語観は理想言語であり、《論考》の哲学はこの理想言語によって言語批判を行ない、《論考》の意図はこの言語批判によって「語ることのできる言語」〈理想言語〉の彼方に、「語ることのできない」倫理的な領野を示したことである。

これに対し、《研究》の言語観は言語ゲームであり、《研究》の哲学はこの言語ゲームによって言語批判を行なっているが、それならば《研究》の意図は、この言語批判によって「語ることのできる言語」〈言語ゲーム〉の彼方に⁴⁾、《論考》の場合と同じく、果して再び「語ることのできない」倫理的な領野を示すことであろうか。

従って次の課題は、〈言語ゲーム〉という概念の用法を、《研究》の第134節以降で更に究明することである。そしてその成果をまっけて、《論考》と《研究》とに共通していると思われる意図、すなわちウィトゲンシュタインの思想の根柢にあると考えられる〈倫理的なもの〉に迫ってゆくことであろう。

〔Ⅰ〕

《哲学研究》の第一部、第133節までに、ウィトゲンシュタインは言語ゲームという概念の用法を、普通の言語ゲームから始め、諸活動の全体——生活様式——家族的類似性、といった一連の用語によって追求した。引き続き以降の節で、ウィトゲンシュタインは、言語ゲームという概

念を<状況>という用語によって究明しようとする。

状況という用語によって言語ゲームの用法を説明する例は、すでに《研究》の29, 33, 35, 117等の節にみられる。しかしこの用語が言語ゲームの新たな様相を開示するのに使われるようになるのは、<ある命題は命題変項としての用法をもつだけではない>、と述べている第134節以降である。この節からウィトゲンシュタインは、再び《論考》を念頭に浮べて、命題の意味は、真と偽というような二値論理的説明では、明らかにならない意味をもつことを、色々と例を挙げて解明しながら、次第に<状況>という用語を議論の正面に据えてゆく。

ウィトゲンシュタインは考える。ある式を理解する(154)とか、あるものを読む(156)ということをも正当化してくれる基準は、さまざまな状況(164)である。例えば、読むという出来事が可能なのは、人々がその読む用語に慣れ親しんだから(167)であり、ある数式の先を展開できるのは、ある状況の下で先を知れるから(179)である。また例えば、ある言語——合う、できる、理解する——の用法は、状況の多様性に対応している文法(182)である。かくて「ある規則に従い、ある報告をし、ある命題を与え、あるチェス・ゲームをするのは、慣習(用法・制度)である。ある命題を理解することは、ある言語を理解することである。ある言語を理解することは、ある技術を修得することである。」(199)それゆえ、人は規則に私的に従うことはできない。(202)

かくてウィトゲンシュタインは、言語ゲームの用法を、状況といういわば文脈言語に置き換え、言語ゲームの適用範囲を更に拡大しつつ、人間共通の行動様式(206)にも意を用い、言語ゲームの交通整理を怠りなく遂行してゆくのである。

ところで我々は、言語ゲームを<状況>という用語に代えて、ウィトゲンシュタインの考えていると思われることを理解してきたのであるが、どの節あたりか定かならないが、ウィトゲンシュタインがこの<状況>の用法に、その表面の意味とは裏腹な何かあるものを、次第に意味させようとしているのに気が出す。このことは、第207節の最後の、「我々の<言語>と呼んでいるものには規則性が欠けている」というくだりで、突如みえてくるように思われる。この節でウィトゲンシュタインは、音声と行動との間に規則正しい連関は成り立っていない、と書きつつ、それにもかかわらず行動において音声は余分でない、という。同様に、<等々>を意味する<身振り>の状況(208)や、黒いしみが白い周辺に<合わさっている>ことの状況(216)は、単純に記述されえないと書きつつ、それにもかかわらず、<等々>を意味する身振りが役立つ状況、黒いしみが白い周辺に合わさっている状況のあることを認めている。

<音声>や<身振り>、そして<合わさっている>といった状況において考察される言語ゲーム、それはもはや言語ゲームという概念が、単に<規則>によって理解されていないことを物語る。「規則に従っているとき、私は選択しない。私は規則に盲目的に従っているのだ。」(219)状況は一致(224)とか同じ(225)という語によって規則を作る。しかし規則を作る状況は規則と一致しないし、規則と同じではない。一致や同じと考えるのは、<規則に従う>ということの外観

(外的特色)だけを見ていることである(235)。それはあたかも、正しい結果には達するが、どうしてかをいうことのできない芸術家はだの計算のようなものである。だが彼は計算してないのか。(236)このような思想は、規則を作り規則に従い規則を自明なこととしつつ(238)、決して規則化されえない状況を、言語ゲームという概念の根柢に潜めているように思える。

この事情は《研究》の早い節で、ウィトゲンシュタインが「<ゲーム>という概念は輪郭のぼやけた概念」(71)であると述べつつ、「しかしはっきりしない概念は、そもそも概念なのか。——<どこかこの辺に立っている>ということは無意味だろうか。」(71)と問うた事例^{4:29}と似ている。だがそこでウィトゲンシュタインの意図したことは、単に理想言語に対する用法的言語の意味の豊かさ、多様さを平面的表層的に拡大してみせただけで、言語ゲームという概念の深層を立体的に探求してゆくものではなかった。ところがここでウィトゲンシュタインの意図していることは、言語ゲームという概念が形成されてくるということの根柢を明らかにしようとすることであると思われる。

〔Ⅱ〕

<状況>という用語は、一般に二つの意味をもっている。一つは客観的な環境の側面からくるものであり、他は主体的な行為の側面からくるものである。状況は元来、この二つの側面が絡み合うところから生れる。そうすれば、状況としての言語ゲームは、この絡み合いの中で共通の用法となりうる部分である、ということになるであろう。しかしこのことを逆の面からいえば、状況は人間の主体的な行為が必ず絡んでいる以上、決して共通の用法となりえない主体的行為の私的部分を含んでいることになる。ウィトゲンシュタインは、状況としての言語ゲームを語る時、決してこの部分を無視してはいないのである。

言語ゲームは、確かに、人間が相互に理解し合える共通の条件を問題としている。言語ゲームは、《論考》の理想言語でさえも、《言語》ゲームのひとつの用法とみなす。そして複雑で多様な状況の網の目を、ひとつ一つ根気よく把握することによって、言語の用法を一層広めることができる。しかし状況にある人間の主体的行為は、すべて共通の用法をもつ目の網に表出できるのか。ウィトゲンシュタインは、言語ゲームの状況を語ることによって、単に言語ゲームの公分母を明らかにする仕事を主な目的としているようには思えないのである。

ウィトゲンシュタインは第243節に到ると、状況としての言語ゲームを語ることから、次第に<私的言語はない>という議論へ熱中し始める。この移行は、表面上は確かに、共通の用法としての言語ゲームを論じた以上、次にはだから<私的言語はない>のだ、という反証を始めたという、ごく自然な推移のようにみえる。しかしウィトゲンシュタインが、私的言語はない、と主張

するとき、彼の語り方は余りにも熱心であり、ときとしてはむきにさえなっているように思える。彼の真の意図は、本当に、言語の公的部分の基礎づけにあり、私的部分を拒否することになったのであろうか。彼の語り口には、常に何か逆説めいたものがつきまとうのである。

さてウィトゲンシュタインは、第 243 節以降、〈私的感覚はない〉という議論を通して私的言語の否定に熱中し、事例として〈痛み〉を話題とする。そして次のように論じる。我々は自分の痛みについて、〈私は痛みを感じている〉とはいえるが、〈私は自分の痛みを感じていることを知っている〉とはいえない(246)。私の痛みは私が直接に感じているもので、この感じそれ自体は知識の対象とならない。これに反し、我々が他人の痛みを理解するのは、すでに〈痛み〉という語の文法が用意されていること(257)、従って一般に〈感覚〉という語はそれが語である以上、共通の言語に含まれている語であること(261)を意味する。かくてウィトゲンシュタインは、次のように書く。「私的な体験について本質的なことは、元来、各人は自分独自の標本をもっているということなのではなくて、他人もこれをもっているのか、あるいは他のものをもっているのか、誰も知らないということである。」(272)

言語ゲームの側から、私的な体験について問題とするとき、各人は自分独自の何かをもっている、などと我々はいうことはできない。いえることは、誰もそういうことは知らない、ということである。ここに、共通な用法によって、言語ゲームが自らに課する限界がある。しかしウィトゲンシュタインは、更に続ける。「だから、一部の人間はある赤さの感覚をもっているが、他の一部の人間は別な赤さの感覚をもつ、と仮定することは——検証できないけれども——ありうることであろう。」(272)

上の引用文で、我々は次のことを確認する。ウィトゲンシュタインは、一方で言語ゲームの共通の言語としての限界、すなわち〈私的言語はない〉ことを明確にしなが、他方で私的体験、私的感覚の世界のありうることは、決して否定していないのである⁶⁾。

ウィトゲンシュタインは第 273 節以降も、色彩、痛み、映像、等の例を挙げながら、これらの感覚はひとたび概念としての表現を与えられれば、すべて言語ゲームになりうることを、えんえんと繰り返しては説いてゆく。例えば、ある色を赤であると認識するのは、ドイツ語を学習したようなものだ(381)、とか、「〈痛み〉という概念をあなたは言語とともに学習したのだ」(384)、という。しかし同時に彼は、言語ゲームになりえない私的感覚の世界を絶えず留保しておく。例えば、彼は、実際の痛みは無ではなく、文法上の対象にならないのだ(304)、とはっきり述べている。彼は熱心に、言語の豊かな用法を語りながら、しかしその背後では絶えず、用法化できない言語の深層に関心を向けているように思えるのである。

〔Ⅲ〕

ウィトゲンシュタインは私的言語を拒否した。言語が本来、共通語としての言語ゲームの枠の中で考察される以上、言語に私的な部分は、当然ありえない。同様に、感覚も言語として表現される以上、私的感覚はありえない。しかしこういう言語観は同時に、言語化しえない私的な部分、言語として表現できない当事者の私的感覚（痛みそのもの）を否定してはいない。ウィトゲンシュタインは、言語は逆にかかる部面に関与できない、といているのである。

<矢印が指し示す>ということはどうして生じるのか、を議論している節がある。ウィトゲンシュタインはいう。「矢印が指し示すのは、生ある者がこの矢印について行なう適用においてだけである。」(454) ここには明確に、<生ある者>と、彼が矢印について行なう<適用の文法>とが、対比されている。また彼は書く。「文法は、言語がその目的を果し、これこれの仕方で人間に作用するためには、どのように作られていなければならないか、を何も述べてない。文法はただ記号の用法を記述するだけで、どんな仕方でこの用法を解き明さない。」(496) 人間が文法に作用するのであり、文法を作り文法を適用するのは人間なのである。この意味で、文法の諸規則は<恣意的>といえる(497)。しかし人間は、この恣意的な記号の用法を修得し、これに慣れること(508)が必要である。そうしなければ、言語を通じた共同社会のコミュニケーションは、成り立たないからである。人間は自ら言語を作り、そしてその言語に自ら慣れるのである。

文法は、ただ記号の用法を記述するだけだという。そしてこの文法の諸規則をすら<恣意的>とするのは、文法の根柢に、文法に作用し文法を作り、文法を適用している行為的人間の働きを暗示する。このように人間と文法との関係は、人間が文法を作り、そして人間が自ら文法の適用範囲とその限界を定めることにあったとすれば、人間は言語の領域で、自ら如何に私的言語のありえないことを強調したとしても、そのことによって、決して言語化できない領域を否定したことにはならない。人間は自分のすべてを共通語としての文法に表現し、他者との意思疎通を図ろうとする。だがそのため、たとえ如何に新たな文法を創出できたとしても、絶えず表現できないもの、意味をなさないものを、語の根柢に残してしまう。ウィトゲンシュタインは、できる限りのすべてを言語ゲームの中に含ませ、その意味を状況という目の網の中で理解しようと努める。そのために彼は、状況の中へ深く入り込むが、そうすると益々彼は、状況の深層へ触れてゆくことになるのである。

例えば、ウィトゲンシュタインは、<否定>という語の用法を考えてみる。「<鉄は摂氏100度で溶けない>というのと、<2掛ける2は5でない>というのは、同じ否定なのか。」(551) この問いは、同じ否定かどうかを判定する規則を作れば解消するのか。第一、そのような規則が作れ

のか。また二重否定は、肯定と同じなのか。同じならば、なぜ最初から肯定を用いないのか。違うならば、否定の強めであると説明することで、問題は解消するのか。二重否定の用法は、たった二つの用法の規則に尽きるものではあるまい。語の用法は状況と切り離して理解できないけれども、あらゆる状況の可能性を想像してみても、なお<否定>という語の根柢に、意味の理解できない深層が残るのである。

そこでウィトゲンシュタインは、語には表面だけでなく深層の次元(594)もあるとか、それぞれの文章の言表に伴う一定の感じ(595)や、その言表の感じを占める雰囲気(596)を語り出す。そして彼は、語の用法において、<表層文法>と<深層文法>とを区別する(664)に到る。表層文法は、文章構成における語の適用の仕方であり、語の用法の部分である。しかし深層文法は、このような表層文法で捉えることはできない。むしろ表層文法を可能にし、この文法を構成せしめる源基をなしている。ウィトゲンシュタインは、第664節で直接、深層文法について具体的な説明を与えてない。でも彼がそれ以降の節で、結びつき<Verbindung>(681,682)とか、つながり<Zusammenhang>(683,684,686)を話題にし始めるとき、彼はもはや単に、語の用法の分析をしているのではなく、語をゲームとして構成することを可能にし、表層文法を作っている深層文法の在り方を問い始めているのである⁷⁾。ウィトゲンシュタインは、《研究》第一部の最後の方に到って、ようやく言語ゲームの深層文法を正面から話題にする地点に到達したように思われる。

[IV]

《哲学研究》の第一部(1936~1945)は、第693節で終わっている。ウィトゲンシュタインの哲学思索は、この通し番号の順序を追いながら、言語ゲームの用法が適用できるありとあらゆる領野を開拓し渉猟した。だがそうまでしても、それは所詮、あくまで表層の領野であったと思われる。

これに対し《哲学研究》の第二部(1947~1949)は、同じく何百もの節に分れているが、通し番号は付いてない。もはやウィトゲンシュタインの哲学思索は、通し番号の順序に従う必要が益々なくなり、どの節から書き始め、どの節をどこの位置におこうと、思索の妨げにならないかのようなのである。それは、ウィトゲンシュタインの言語ゲームを扱うまなざしが、言語ゲームの表層の拡がりから、その深層へと方向を転換してゆくことに対応しているように思われる。それとともに、用例にして扱われる語にも、悲哀、恐れ、希望、信念、といった情緒語が多くなり、また図形や画像の観相点(Aspekt)が頻りと話題になる。そして、私の構えとしての観相点、一定の状況で一定の表情を与える言語ゲーム、観相点をみる表象力、また量りえない証拠としてのまなざし、口調、身振りの微妙さ、等が語られるようになる。ウィトゲンシュタインは、言語ゲームの自発性・独自性の根柢を、<語ることのできる>表層から、語ることが微妙な、そして遂に語る

ことのできなくなつてゆく神秘の層へと、深く求めてゆくようにみえる。

ウィトゲンシュタインは、《論考》で独我論を扱っているが、彼は独我論を決して否定していないことに注目しよう。彼は独我論を、次のように捉えていると思われる。——私がそれだけを理解する唯一の言語（理想言語）によって、私は他者と客観的に交わることができる。この言語の限界は私の世界の限界であるが、この限界内で私という小宇宙は、他の小宇宙と交通し伝達し合うことができる。しかし限界外では、私は、そして各自は、正に独我である。——もし彼の独我論の主旨を、このように理解してよいとすれば、彼の《論考》は、〈理想言語〉を立て、〈私的言語〉を否定しつつ、他方で独我論の私的深淵を認めていたことになる。独我論は、「語ることのできるものではなく、それは示される」(5・62) ものなのである。

では《哲学研究》は、《論理哲学論考》と同じく、語ることのできる表層文法の世界を解明してみせるが、そうすることによって実は、語ることのできない深層文法の領野を示そうとする〈逆説〉をやろうとしているのであろうか。《論考》は、語ることのできる言語の彼方に、語ることのできない領野を示したが、どうも《研究》は、語ることのできる言語の深層に、語ることのできない領野を示そうとしているようにみえる。そしてウィトゲンシュタインは、語ることのできない領野を、言語の彼方からその深層へ探し求めることによって、言語の根柢に独我論を認める気配を、いよいよ濃厚に示しているように思える。独我論の思想は、単独者の思想につながる。しかしウィトゲンシュタインの哲学に、もし単独者の思想があるとしても、彼の単独者は、ケルケゴールの単独者のように、神へ飛躍することはできない。ウィトゲンシュタインが指し示すこのような精神は、確かに、ヨーロッパ文明やアメリカ文明の巨大な思潮とは、異質な精神であると考えられる⁸⁾。我々は、この逆説めいた謎⁹⁾を予示しつつ、三回に渡った小論の筆を、ひとまず置くことにする。

註

- 1) Wittgenstein, L., *Schriften 2 von Ludwig Wittgenstein, Vorwort*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1964.
- 2) 《言語論哲学の基礎を求めて》——ウィトゲンシュタイン研究〔I〕——城西大学教養関係紀要第2巻第1号(1978年3月)所収 山口勲。
- 3) 《言語論哲学の基礎を求めて》——ウィトゲンシュタイン研究〔II〕——城西大学教養関係紀要第3巻第1号(1979年3月)所収 山口勲。
- 4) この小論は、次第に《研究》の意図を、言語ゲームの彼方にでなく、言語ゲームの意味基柢に求めてゆくことになる。
- 5) 《論理哲学論考》と《哲学研究》の引用は、次の書物による。
Wittgenstein, L., *Schriften I von Ludwig Wittgenstein*, Frankfurt am Main. Suhrkamp Verlag, 1963.
- 6) Wittgenstein, L., *Bemerkungen über die Farben*, hrsg. G. E. M. Anscombe, Basil Blackwell, Oxford, 1977.

この書物の第一節は、1951年3月に、ケムブリッジで書かれている。この中でウィトゲンシュタイ

ンは、次のようなことを語っている。

色の識別も慣れで、色の一様性や本来の色といった概念はない。また眼のみえる人は盲の人がいることを忘れて、物事を判断する。しかし、みえる、みえないも状況の違いである。更に色盲の人と正常の人とは、言語ゲームの用法で一致しても、各々の人の根柢が一致したわけではない。

ワイトゲンシュタインは、状況とか言語ゲームとかで表わされる概念の深層に、何を考えていたのであろうか。

- 7) 表層文法と深層文法の解釈について、二つの書物を例に挙げ、我々の解釈との相違を明らかにしておく。

i) Hudson, D., Ludwig Wittgenstein, John Knox Press, 1968, p. 55.

ii) Specht, E.K., The Foundations of Wittgenstein's Late Philosophy, tr, Walford, D. E., Manchester University Press, 1969, p. 147.

i) の書物は、表層文法を、文章構成において語が用いられる仕方とし、深層文法を、語が役割を果たしている言語ゲーム、または生活様式とする。そしてこの区別を、《論考》における命題の、真の論理形式とみかけの論理形式(4・0031)の区別と対比している。

ii) の書物は、二つの文法の相違を、次の例で説明する。

A plays a game of chess.

A wins a game of chess.

この二つの文で、play と win という語の用法上の外的な類似性は、ゲームに勝つことを、ゲームをすることと同じ過程と考える誤った解釈をさせるという。シュペヒトによると、この外見上の類似性によって誤るのが表層文法で、これに対しゲームに勝つことを、活動でなくゲームをすることの結果であるとし、activity word と result word とを、用法上で区別してみせるのが深層文法である。

この二つの解釈はどちらも、表層文法をみかけのとか誤った文法と考える点で共通している。これに対し、我々の解釈は全く異なる。表層文法はみかけの誤った文法でなく、言語ゲームにおいて言語の用法を正しく交通整理している。しかし更に深層文法が問題とされるのは、言語ゲームの諸相を可能な限り交通整理してみせる表層文法の根柢が、新に問われるときである。

- 8) 見出しに引用した文章の下原稿は、次の書物に収録されているが、註1)の書物の中でよりも、この方がかなり長文で、非常に示唆に富む内容を含んでいる。

Wittgenstein, L., Vermischte Bemerkungen, Basil Blackwell, Oxford, 1977. s. 20~22.

この書物は、ワイトゲンシュタインの覚書きの類を寄せ集めたものであるが、彼の思想の根柢にうごめくものを、フランツ・カフカのそれと比較しうる点で重要であると思われる。

i) 両者とも、オーストリア・ハンガリー二重帝国下の、ハプスブルク王朝の最期を体験している。

ii) カフカは主都プラハに生きたドイツ系ユダヤ人であり、ワイトゲンシュタインは首都ウィーンに生きたオーストリア系ユダヤ人である。

iii) カフカは小説の中にユダヤ人を全く登上させないし、ユダヤとかユダヤ人といった言葉すら全く使わない。しかし彼の日記類には、ユダヤのこと、ユダヤ人のことがひんぱんに出てくる。ワイトゲンシュタインは、彼の書く論文はもとより、ケムブリッジの講義でも、ヨーロッパやアメリカ系の学者たちとの接触にも、ユダヤやユダヤ人のことを語ろうとしない。だから彼らの回想録にも、そういうことは収録されてない。しかし彼が自分のために書き留めた覚書きの類や、P・エンゲルマンのようなユダヤ人の回想録の中では、ユダヤやユダヤ人のことがよく語られているのである。ヨーロッパやアメリカ系の人々には、決して絶対に漏らそうとしない、打ち解けることのないワイトゲンシュタインの内面性に、我々は彼の思想の根柢にあるものを窺える思いがする。

次の一連の論文は、このような背景を念頭において書いたものである。

《発想の転換を求めて》——カフカとワイトゲンシュタインの場合——の2)ワイトゲンシュタインとウィーンおよび英国経験論 《私学研修》第78号(1977.7)所収 山口勲。

《カフカ研究の視座を求めて》 城西人文研究第5号(1978.2)所収 山口勲。

《ウィトゲンシュタインの思想を理解するために》 城西人文研究第6号(1979.1)所収 山口勲。

なお、この小論はウィトゲンシュタインを、在来のケムブリッジ指向型の解釈に対し、ウィーン指向型の、しかもその根柢にユダヤ的思想のあることを念頭において書いたものであるが、このような方向の考え方に使える文献はまだ乏しい。発想に役立ったのは、以下の書物ぐらいである。

i) Bartley III, W. W., Wittgenstein, T. B. Lippincott Company, Philadelphia and New York, 1973.

ii) P. Engelmann., Letters from Ludwig Wittgenstein with a Memoir, Basil Blackwell, Oxford, 1967.

iii) 《逃亡師》 D・グッドマン 晶文社 1976。

iv) 《ウィトゲンシュタインのウィーン》 A・ジャニック, S・トゥールミン共著 TBSブリタニカ, 1978。

1977年、オーストリアのキルヒベルクで、ウィトゲンシュタイン研究の第二回国際シンポジウムが開催された。そして百人を超える研究者の寄稿した書物が発行されたが、ウィーン指向的な解釈に注目する人はまだ少なく、その彼らの挙げる文献も、上に紹介した1), 2), 4)ぐらいのものであった。ウィトゲンシュタインの思想を、オーストリアへ、ウィーンへ、そしてユダヤ思想との関連へと回帰させてゆく研究は、まだこれからの課題なのであろう。

Wittgenstein und sein Einfluß auf die gegenwärtige Philosophie, Akten des zweiten internationalen Wittgenstein Symposiums, Hölder—Pichler—Tempsky, Vienna, 1978.

9) ウィトゲンシュタインが、この逆説めいた謎に迫ってゆく手続きを、《論考》と《研究》の関係で示すと、次のようになる。

《論考》は、語ることのできる言語を理想言語と措定し、その言語の彼方に、語ることのできない領野として、《倫理的なもの》を示した。次に《研究》は、語ることのできる言語を言語ゲームと措定し、その言語の根柢に、語ることのできない領野として、《倫理的なもの》を示した。そしてこの《語ることのできないもの》は、語ることのできる言語(理想言語, 言語ゲーム)を通して、段階的に言語の深層に、独我論的様相を現わしてゆくのである。

ともあれ、この方法は、事象そのものへ迫る現象学的還元の手続きと似ているように思える。